

中部の

# エネルギーを 築いた

# 人々

名古屋電力を創立し、  
濃飛電気を経営した 兼松 熙

兼松 熙(1860～1952)は、官界、政界を経て実業界に転じ、明治39年に名古屋電力を創立し、奥田正香や福沢桃介に重用され、濃飛電気を経営、晩年は豊田式織機社長を務めた事業家である。

兼松は万延元年12月、岐阜県加茂郡坂祝村に兼松勝助次男として生まれた。明治12年、20歳で坂祝村酒倉の戸長となり、その後加茂郡役所、岐阜県属として勤務し、同28年、曾我部知事の斡旋で内務省県治局に転職し、拓殖務省南部局勤務を経て、32年1月に佐賀郡長となり、知事関清英の片腕として県政郡治改革に辣腕を振った。36年3月の衆議院選挙で佐賀県選出議員に当選、翌37年3月の選挙では郷里の岐阜から立候補し当選した。国会では与党派議員として四派連合の成立、対露同志会の運営で活躍した。



兼松 熙

## 名古屋電力の創立

名古屋電力は兼松が中心になって設立した会社である。木曾川八百津地区に八百津発電所(7500kW)を建設し、名古屋・岐阜方面の工場に電力供給を目指した。岩田作兵衛(甲武鉄道)、桂二郎、三浦泰輔等の東京関係者、兼松熙、渡辺甚吉、奥田正香(名古屋商業会議所会頭)、上遠野富之助(日本車輛)、白石半助(名古屋鉄道)、斎藤恒三(三重紡績)等の岐阜・名古屋関係者が発起人で、東京関係者は主に資金の出資者、岐阜・名古屋関係者は主に電力の需要家であった。兼松は名古屋財界に面識がなかったので、首相桂太郎の紹介状を携えて奥田正香を訪ねた。奥田らは計画に賛同しただけでなく、経営への参加を求め、資本金500万円の半分を名古屋財界で持つこととなった。名古屋電力は、明治39年10月に設立され、社長に奥田正香が就任した。八百津発電所の建設は水路工事が難航して工事費が膨らみ、また不況で資金難に陥ったことから、43年10月、名古屋電灯と合併した。



八百津発電所(当時)



八百津発電所(現況)

## 福沢桃介の支援で濃飛電気を創設

名古屋電灯との合併後、兼松は同社常務取締役役に就任した。「稲永事件」で常務を辞任したが(控訴審で無罪)、福沢桃介の手引きで、大正8年、名古屋電灯監査役(後に取締役)として復活をとげた。

大正10年3月、福沢の支援で濃飛電気を設立し、専務取締役(後に社長)に就任した。濃飛電気は、根尾川上流に根尾発電所を建設(旧称長島発電所、4,050kW、12年3月)し、電気は東邦電力に供給した。販路が確保されて

いたので開業時から1割配当ができた。大正14年には、濃飛電気の姉妹会社として大白川電力を設立し社長となった。15年11月、庄川水系初の発電所として平瀬発電所(11,000kW)を建設した。発電所には「国益ヲ開キ産業ニ資スル所ノ事功ト英断之ヲ開テ沿流起業ノ先駆ヲナシタ」と兼松の功績を記す紀功碑が建てられている。同社は、同年12月濃飛電気に合併、また昭和3年7月、三重合同電気に合併し、兼松は副社長となった。



根尾発電所(当時)



平瀬発電所



根尾発電所(現況)



平瀬発電所紀功碑

## 中部地域での事業活動

名古屋電力の事業を通じて兼松は奥田正香と関係を深め、奥田の側近として愛知電気鉄道や名古屋瓦斯のほか、名古屋土地、中央炭鉱、福寿生命・福寿火災など多くの事業の創設や経営に関わった。また、福沢桃介の求めで兼松が推進役となり、木曾川の運河計画(桑名・笠松間)を構想し、「木曾川開発協会」(大正13年6月)や「岐阜県振興会」(大正15年3月)を設立し



兼松照胸像

たが、福沢の引退により中断を余儀なくされた。

電気事業引退後の昭和4年、経営危機に陥っていた豊田式織機(現豊和工業)社長への就任が要請された。兼松は陣頭にたって再建を成功させ、同社中興の祖とされ、工場には兼松の青銅製寿像が建立されている。昭和15年にすべての事業から引退し、同27年10月名古屋市南区に永眠した。

(浅野伸一)